

21世紀の変わり目にウィンシンと私の中で起こったこと

—EARCAG1999における劇的な出会いから その後の魅力溢れる学術企画—

水内 俊雄*

人生の中で忘れもしない出会いや光景があるとしたら、1999年1月23日、Byung-dooが企画した、第1回EARCAGでのウィンシンとの出会いである。我々の日本チームの一部がプサンから慶州の会場兼宿泊所に着いた時は、あまり街の光が見えない、暗闇の夜であった。三々五々参加者が集まってくる中で、この夜のウィンシンとの初対面の瞬間は覚えていない。しかし翌日の午前中にウィンシンの発表(Ted Talkのようなスピーチのパフォーマンスにも惹きつけられたが)、その後の午後遅くでの私の発表は、お互いの知的好奇心を大いにくすぐったものになった。

この時の印象を彼は次のように語っている。「慶州の会議は、私が当時、それまでに出席した中で最高の会議となりました」。この文章は、わたしの退職にあたって、都市研究プラザの紀要(「都市と社会」6号、26-30頁、2022年)に英語で寄稿してくれた「Mizuuchi-san: An Admiration and Appreciation (水内さん：憧れと感謝の気持ち)」から引用した。この回想にあたって、彼の思いを活字で使うことができる貴重な文章であり、彼の2000年代の研究展開を知る鍵となるので、いくつか利用する。

彼の発表タイトルは、「Governmentality, Time-Space Colonization and China's Socialist Geography (統治性、時間-空間の植民地化と中国社会主義の地理学)」であり、東アジア、国家、権力そして開発にこだわった発表は大変刺激的であった。レポートからその印象的な部分を抜き出すと、

「従って、たとえば、現在、アジアの研究者や実践家たちは、よくあることであるが、自分たちの都市を世界都市に変貌させることを好んで語る。でもこれ自体が西洋の概念である。重要なのは、これらの概念が自らの社会的歴史的起源に類似のコンテキストでのみ関連性を見出すことができる点である」。

あるいは、

「地理的な東、つまりアジアについてどうだろうか？私が上記で主張したいのは、西洋の差異の地理に注意を払うだけでなく、地理学の差異を検討

することが重要であるということである。西洋で通常重きを置かれぬ国々の地理も、時間-空間の概念を用いて理解する必要がある。これは、紛争や発展途上の問題に焦点を当て、資本の問題だけに偏向するものではない。アジアや東洋の社会主義国は、文献では基本的に無視されてきた」。

このように東アジアへのこだわりを見せたパラグラフが散見される。

さらに国家への着目は、

「具体的には、生活のすべてではないにせよ、多くの局面で国家が依然として支配的である中国では、統治慣行の役割やその制度形態、行政境界について、ある程度の詳細さをもって取り組む必要がある。……この欠陥を是正するために進むべき道は、上記の議論の帰結として、資本の論理というよりも国家の実践の論理に重点を置くことである。」

そしてウィンシンはフーコーの統治性概念に注目する。

「彼の概念の良い点は、国家制度に集中していないことである。その代わりに、彼はミクロな場における規範の実践やプログラムを特定することに焦点を当てている」

と、その応用可能性に着目し、ルフェーブルに言及する。

「社会主義国家の活動を、西洋のように『距離を置いて統治する』のではなく、『距離を持って統治する』と考えることが重要である。…距離を持って統治する方法とは、表象を編み出し、異なる時空間をもって他者に押し付けることである。ここで、ルフェーブル(1991)の空間の実践に関する2つの洞察に満ちた概念、『空間の表象』と『表象の空間』を活用することが有益となる。前者はあらゆる社会で支配的な空間を指し、科学者、プランナー、都市計画家、社会工学家によるより形式的で抽象的な表象によって構築される。後者は『生きられた』空

* 大阪公立大学客員教授、大阪市立大学名誉教授

間であり、日常の『利用者』の生活を通じて形づくられていく。社会主義下の計画構造によって生み出された表象は、前者のカテゴリーに属する。それらは中央で生産され、周辺に移される。いったん周辺部がこれらの表象に従って実践すれば、中央の権力の軌道に引き込まれる。時が経つにつれて、より多くの主体や空間が植民地化されていく。

「言い換えると、都市化は国家による時間-空間の植民地化を反映し、この解釈は、都市化をより深く理解するのに役立つのである」。

この一連の流れは私が翌年に書く博士論文「近代日本における国土開発・都市開発の地理学的研究」の分析枠組みに大変近いところがあった。当日の私の発表の日本の近代国家による空間の生産を、多くの国家・地域統計により実証したものであった。従って彼は私の発表に熱意をもってコメントしてくれたのである。彼の言は、以下のようになっている。

「とりわけ、Toshioについての簡潔かつ包括的なコメントをするとすれば、彼の寛容さでしょう。第一に、彼はいつでも研究上の洞察力や知識を提供してくれます。慶州での彼の発表は、地理的な現象を説明するために、日本の中央、地方の歳出に関する詳細な歴史的データをいかに綿密に引き出すことができるかを示すものでした。当時の私は、特に新しい地域地理学とその東アジアにおける意味を知りたいと思っていました。彼の研究は、私の視野を広げてくれました」

彼は自分の東アジア理解を自嘲をこめて、ソウルや東京は欧米渡航へのトランジット先でしかなかったし、「東アジアは漠然とした地理的概念でしかなく、ほとんど実体がありませんでした」と振り返る。そしてソウルや台北を中心に、東アジアへの研究者ネットワークが俄然広がり、多くのワークショップや会議にでるようになったことを、「私のような近視眼的な『子供』を育ててくれたToshioに感謝しなければなりません」と述懐している。

ここで付言しておきたいことは、当時に日本側の参加者は、わたしが代表を務めていた科研「地政学・植民地主義との関連からみた近代日本の国家形成および地理-空間の思想」(1998-2000)のメンバーであった¹。日本の批判地理学者の集まりでもあり、その後、EARCAG参加の主要メンバーはこの地理思想科研グループから若手研究者も含めて継続的に登

場することになったのである。今回、多くのメンバーが、彼の思い出に哀悼の意を表すメールを送っている。

さてもう一人この会議でわたしの大きな刺激を与えてくれたのが、Kim Soo-Hyunによる「Urban Poverty and the homeless, Cases of S. Korea, Japan, and England (『都市貧困とホームレス：韓国、日本、イギリスの事例』)」であった。Soo-Hyunに質問を多く投げかけたのは、1998年に突然に大阪市長から大阪府立大学に指令された大規模なホームレス調査に関わったからであった。彼の発表はデータに基づいた比較と、どのように取り組んでいくのかの政策指向の実践家的思考に基づいていた(彼は後の文在寅政権において福祉担当補佐官を務めた)。まさしく都市国家の果たすべき役割がはっきり見える問題対象であり、このアプローチに大変親近感を抱いた。同時多発的に1998年にホームレス問題は、韓国だけでなくウィンシンから香港でも起こっていることを知った。批判地理学の地に着いた実践のひとつはこのホームレス問題も含んだ困窮者のハウジング問題に取り組むことであるとウィンシンと意見が一致した。

このように双方にとって大変実りの多い会議は25日テグに場所を移して続いた。最終日の26日は半日の慶州のツアー、仏国寺など訪れたことが記憶に残っている。夕刻に金梅空港でウィンシンらが笑顔で手を振りながら再会を誓った時のベストショットの写真がいまだに出てこない。25年後のちょうど同日、1月26日に旅行先の日本青森県で彼は逝去したが、このような偶然はこの世にあるのだろうか。再会を誓っての一時の別れが25年後に最後の別れになってしまったとは、何とも悔しくて口惜しい。

二人の1990年代の学問の飛行は、この出会いによって大きく旋回することになる。この会議でのもうひとつの出会い韓国のホームレス問題であったことは既述したが、帰国後ウィンシンに、国民国家よりも都市国家の問題からもっと具体的に、香港での困窮者の住宅問題について調査の可能性を持ち掛けたところ、スコオッター問題に詳しいカナダ・カルガリー大学のアラン・スマート教授を紹介された。早速ウィンシンと一緒に大阪で、アランを招待して、Osaka Workshop for Frontiers of Asian Geographiesを開催した。思いもよらぬ研究の東アジアへの展開が急速に始まり、2000年秋には、科学研究費助成で「アジア先進地域におけるホームレス・不法占拠住民問題-日本・韓国・香港の比較研究」のタイトルで応募

1 この科研では報告書として東アジアとの関係を意識して、次の報告書を英語で出している。Nation, Region and the Politics of Geography in East Asia, Osaka City University, 1999. <https://www.omu.ac.jp/lit/geo/info/publication/entry-36336.html>

し、2001年から3年の期間で採択されることになった。待ちきれずに2001年3月に最初の香港と台北で、ホームレスのシェルター調査を行うことになった。

ウインシンに尋ねたところ当時香港でホームレスのシェルターを論じる研究者はいないとのこと、彼にも調査をどう始めたらよい人を探してもらった。偶然にも彼の奥さんがつとめている救世軍がホームレスシェルターを運営しており、そこの施設長を紹介された。早速、ウインシンと一緒に油麻地の上海街にあるシェルターを訪ねた。彼も初めてのいわゆる福祉機関での調査である。ここから怒涛のようにシェルター調査が始まり、それを運営するNGOや宗教系の社会福祉団体のヒアリングが積み重ねられた。

その当時はウインシンは振り返って次のように言っている。

「私は市内の社会福祉機関とより親密なネットワークを築き始めました。それに伴い、地域社会のことを以前よりもずっとよく知るようになりました。例えば、ホームレスの問題は、以前は私の頭の中では漠然とした概念であり、SoCO (Society for Community Organisation) のようなコミュニティ組織も私にとっては異質な存在でした。しかし、Toshioのおかげですべてが変わりました。」

2001年3月以降、二人とも研究スタイルが大きくコミュニティベースに移行したと言え、2000年代以降のウインシンのストリートレベルでの活動が活発化し、深化していくことになる。そのことは香港批判地理学会の2002年設立とその後の彼のキャリアの紹介から知ることができる。

二人の大きな共通点は、都市国家がどのような空間を生産していくのか(空間の表象)、それに対してNGOや利用者がその空間=コミュニティをどのように消費しマネジしていくのかの最適解を常に求めることが基本にあったといえる。それはそのコミュニティや近隣で交渉を通じて達した合意にもとづく空間を生み出すことであった(表象の空間)。

批判的地理学者は、しばしば過度に理論的でアムチュア批評に閉じこもっていると批判されることもある。しかし、ウインシンはコミュニティと関わり、多くの対話に参加し、地域への愛着を育む洞察や将来のビジョンを提供した。この意味で、彼もまたすぐれた都市社会地理学者であったと言えるだろう。

こうした行動的かつ理論的な都市社会地理学者に

とって、わたしが所属するURPで2007年にグローバルCOEの大きなファンドを5年間いただくことができたことが(本特集最終章を参照のこと)、大きな研究上のメリットとなった。このお金を使って、彼の大学にURP香港海外オフィス設けた。彼は次のように述懐する。

「これにより、地域問題の社会的側面に関する政策研究に資金がURPから提供されました。……この資金援助のおかげで、私は都市開発に関するより理論的な作品を地域社会に広めるための新たな手段を得ることができました。これは、私にとってWin-Winの関係であると言えます。」

またこのURP資金や彼の独自のお金で、彼は実に多くの魅惑的なワークショップやフォーラムを企画した。それを下表で一覧できるようにした。ワークショップは写真からその雰囲気がわかるように、こじんまりして大変アットホームなものであった。テーマ決めから、講演者の招へいなどはすべて彼が差配した。理論的から経験的研究まで発表内容は極めて高質なものであった。そして疲れた頭を癒すべく、夜はもちろん気の利いたディナーと合間のミニシティツアー付きである。ここで育まれた研究者交流からいくつかの書籍や論文が生み出された。彼自身も次のように振り返る。

「この資金を使って研究成果を世界の学会に広めるために、私自身、あるいは私たちが共同で会議や



ホームレスシェルターを訪れ、関係するNGOの代表と話すウインシン

2008年1月
(水内俊雄撮影)

ワークショップを開催し、これに関しても細心の注意を払ってきました。」

一緒に参加したURP若手研究員や院生ともども、このプログラムから受けた恩恵は実に大きく、そして忘れられないよき思い出となっている。

最後に、彼の人格を要約すると、「歓待と思いやり」、「優雅さとスタイリッシュさ」、「親しみやすさと居心地の良さ」、「仲間との絆=同志愛を大切にすること」、そして何よりも「地域への愛」に特徴付けられるよう。本当に人を惹きつける魅力的な人物である。彼の目指すコミュニティが、それが表象の空間であるのかどうか、天国に先に行かれたウィンソンとともに、この東アジアの地でよりよきものになるよう伴に追究していきたい。それが彼流の東アジアの批判的視座を強く有した都市社会地理学であったのかもしれない。

THE WORKSHOP ON
**SOCIAL JUSTICE
AND THE CITY**
4TH – 6TH DECEMBER, 2013
AAB 1312, ACADEMIC AND ADMINISTRATION BUILDING
HONG KONG BAPTIST UNIVERSITY

SESSIONS
WESTERN THEORIES AND CHALLENGES FROM THE GLOBAL SOUTH
SOCIO-ENVIRONMENTAL JUSTICE
DEVELOPMENT MODELS AND SOCIAL JUSTICE
RENT GAP AND REDEVELOPMENT
DEMOCRACY AND POLITICS
HIGH-DENSITY DEVELOPMENT AND EVERYDAY LIFE
UNIVERSITY AND DOCKYARD SPACE
MOBILITY AND THE STREET
THE HOMELESS, THE AGED, THE WORKING CLASS AND THE ORDINARY

ORGANIZED BY
DEPARTMENT OF GEOGRAPHY, HONG KONG BAPTIST UNIVERSITY

SPONSOR
RESEARCH COMMITTEE, HONG KONG BAPTIST UNIVERSITY
CO-SPONSOR
HONG KONG RESEARCH GRANT COUNCIL (RESEARCH GRANT 2008/2009)
FUNDING FOR ACADEMIC STAFF, HONG KONG BAPTIST UNIVERSITY
MINOR PROGRAMME IN SOCIAL JUSTICE AND EQUALITY
FACULTY OF SOCIAL SCIENCES, HONG KONG BAPTIST UNIVERSITY

URBAN RESEARCH PLAZA, OREGA CITY UNIVERSITY
HONG KONG BAPTIST UNIVERSITY CHRISTIAN CLUB
HONG KONG CRITICAL GEOGRAPHY GROUP

香港 Baptist 大學
HONG KONG BAPTIST UNIVERSITY
香港城市大學
CITY UNIVERSITY OF HONG KONG
地理學系
DEPARTMENT OF GEOGRAPHY
URP
CONTACT: Dr. LEE Chi Yung Judy
E-mail: jcdyromail@gmail.com
Website: http://geog.hkbu.edu.hk

2013年12月開催のSocial Justice and the City
ワークショップのポスター
(ワークショップ主催者提供)



少人数でリラックスな雰囲気のある会場 Social Justice and the City 2013
(水内俊雄提供)

表 香港オフィスで開催されたイベントの一覧

	年月	イベント
1	1999/08	Osaka Workshop for Frontiers of Asian Geographies (大阪開催)
2	2001/12	EARCAG 2nd Meeting / Alternative Geographies of Asia in the New Millennium
3	2004/04	The First Hong Kong-Japan Workshop: Power, Space and Housing of the Urban Poor
4	2007/05	The Transforming Asian City: Asian Urbanisation Conference
5	2008/01	The Workshop on Social Inclusion, and Cultural Creativity (URPサブセンター開設式)
6	2009/05	The International Workshop on Urban Redevelopment in East Asian Cities: The People's Approach
7	2011/05	Urban Utopian: The International Workshop
8	2012/05	The International Workshop on Urban Utopianism cum China-India Forum Beyond Gentrification
9	2013/12	The Workshop on Social Justice and the City
10	2015/01	The 5th EA-ICN 2015 (マカオへのフィールドトリップあり)
11	2015/12	The International Workshop on High-density Development and Social Justice
12	2016/12	EARCAG 8th Meeting / Radicalism in Theory and Practice
13	2018/07	The 8th EA-ICN, Towards the Establishment of the "East-Asian Inclusive Cities"

What Happened between Wing Shing and Me at the Turn of the 21st Century: The Impactful Encounter at EARCAG 1999 and His Fascinating Academic Initiatives Thereafter

Toshio MIZUUCHI*

If there were encounters and scenes in life that one would never forget, it would be the meeting with Wing Shing during the first EARCAG organized by Byung-doo on January 23, 1999. When some members of our Japanese team arrived at the venue and accommodation in Gyeongju from Busan, it was a dark night with little city lights visible. Amidst the gathering of participants, I do not recall the moment of any meeting with Wing Shing that night. However, the next morning, Wing Shing's presentation (which captivated me with its Ted Talk-like speech performance), followed by my own presentation in the late afternoon, greatly stimulated each other's intellectual curiosity.

He described the impression of that time as follows: "I attended the Kyongju meeting, which had turned out to be the best meeting I had ever attended by then." This passage is quoted from "Mizuuchi-san: An Admiration and Appreciation", whose first draft was submitted in December 2021 to the journal of the Urban Research Plaza upon my retirement. It is a valuable text that captures his thoughts, and serves as a key to understanding his research developments in the 2000s, hence I will quote it several times in this reminiscence.

The title of his presentation was "Governmentality, Time-Space Colonization, and China's Socialist Geography", which focused on East Asia, nation-states, power, and development, proving to be highly stimulating. Extracting from the report, some remarkable passages include,

"Thus, for instance, it is a commonplace that Asian scholars and practitioners nowadays are fond of talking about transforming their own cities into world cities - itself a Western concept. The point is that these concepts can find relevancy only in contexts similar to their own socio-historical origins,"

and,

"what about the geographical East, that is, Asia? What I want to argue in the above is that in addition to paying heed to geographies of difference in the West, it is essential to examine differences in geography. Geographies of countries not usually counted in the West must also be understood with time-space concepts that also focus on issues of conflicts and underdevelopment and that are not capital-biased. As Asia and the socialist East have basically been ignored in the literature,"

which illustrates his dedication to East Asia, with his slightly accented yet resolutely British English speech echoing in my mind.

Further, attention to the nation-state is emphasized, stating,

"Specifically, in China, where the state is still dominant in many, if not all, aspects of life, the role of governing practices and their institutional form and administrative boundaries should be addressed with some levels of detail... The way to go about remedying this deficiency is, as a corollary of the above argument, not so much the logic of capital as the logic of state practices."

Moreover, he focuses on Foucault's governmentality, highlighting its applicability, and references Lefebvre, stating,

"One good thing about his concept is that it does not concentrate on state institutions. Instead, he focuses on the identification of programmes and practices of rules in micro-settings."

"I consider the activities of the socialist state not so much, as in the West, 'governing at a distance' as 'governing with a distance'... The way governing with a distance works is to devise a representation and impose it on others at different times and spaces. Here it is instrumental to draw on Lefebvre's (1991) two insightful

* Affiliate Professor, Osaka Metropolitan University; Emeritus Professor, Osaka City University

concepts of spatial practice: representations of space and spaces of representation. The former refers to the dominant spaces in any society and are constructed of the more formal, abstract representations by scientists, planners, urbanists and social engineers. The latter are 'lived' spaces that take their shape through the daily routine of 'users'. Representations produced by the planning structure under socialism belong to the former category. They are produced at the centre and then transferred to the periphery. Once the periphery practices in accordance with these representations, it is drawn into the orbit of power of the centre. As time proceeds, more and more agents and spaces are colonised."

"Put differently, urbanisation reflects a time-space colonisation by the state. This interpretation helps us to understand urbanisation with more insight."

This series of discussions closely resembles the logical structure of my doctoral thesis, "Geographical Studies on Land and Urban Development in Modern Japan Since the Meiji Restoration of 1868", in June 2000. My presentation on that day was largely empirical demonstrating numerous national and regional statistics. Therefore, he enthusiastically commented on my presentation, saying,

"Among others, the succinct as well as inclusive comment that I can make of Toshio is his generosity. First, he is always accessible to offer his research insights and knowledge. His presentation at Kyongju exhibited how meticulously one can tease detailed historical data on local spending to account for geographical phenomena. At that time, I was fancied with, among others, the new regional geography and its possible meaning for the East Asian context. His research had then broadened my vision."

He humorously reflects on his understanding of East Asia, noting that Seoul and Tokyo were merely transit points for his travels to Europe and the Americas, stating,

"East Asia used to be only a vague geographical concept with little substance."

Then, he humbly recalls how a researcher / practitioner network for East Asia began to expand, particularly cen-

tered around Seoul and Taipei, with the participation in numerous workshops and conferences, saying,

"I am proud to say, all over East Asia. To these, I must thank Toshio for bringing up a myopic 'child' like me."

It is worth noting here that at the time, the Japanese participants were members of the research project "State Formation and Geographical-Spatial Thought in Modern Japan from the Perspective of Geopolitics and Colonialism" (1998-2000), which I chaired. This project was also a gathering of critical geographers in Japan¹, and subsequently, the major members of EARCAG, including young researchers, continued to emerge from this 'geographical thought research group'. Many members have sent condolence emails for his memory in Japanese.

Another significant source of inspiration for me at this conference was Kim Soo-Hyun's presentation on "Urban Poverty and the Homeless, Cases of South Korea, Japan, and England." I engaged Soo-Hyun with numerous questions because I had been suddenly involved in a large-scale homeless survey ordered by the Mayor of Osaka to Osaka City University in summer of 1998. His presentation was based on data-driven comparisons and policy-oriented practical thinking on how to address the issue (he later served as an assistant secretary for welfare in the Moon Jae-in administration). The issue clearly illuminated the role that city states should play, and I felt a strong affinity for this approach. It was also around 1998 when I learned that the homeless issue was not only happening in South Korea but also in Hong Kong (and Taiwan), from Wing Shing. We both agreed that one of the practical applications of critical geography is to address housing issues for the disadvantaged/deprived, including the homeless.

The conference, which proved to be highly fruitful for both (of course for all attendants as well), continued in Taegu on the 25th. I vividly remember the half-day tour on the final day, the 26th, visiting places like Gyeongju and Bulguksa Temple. The most impressive shot of Wing Shing and George Lin like a comedian, smiling and waving to each other at Kimhae Airport in the evening, when we vowed to meet again, still hasn't appeared. Exactly 25 years later, on January 26th, while traveling in Aomori

1 In this research project, we are mindful of our relationship with East Asia and have therefore produced the following report in English: *Nation, Region and the Politics of Geography in East Asia*, Osaka City University, 1999. <https://www.omu.ac.jp/lit/geo/info/publication/entry-36336.html>

Prefecture, Japan, he passed away. Is such a coincidence possible in this world? It's incredibly regrettable and heartbreaking that what was meant to be a temporary parting with a vow to meet again ended up being the final farewell after just 25 years.

The encounter between the two of us in the end of 1990s profoundly changed the trajectory of our academic pursuits afterward. I've already mentioned our encounter at this conference regarding homelessness issues in South Korea. Upon returning Osaka, I discussed with Wing Shing the possibility of investigating the housing problems of the disadvantaged people in Hong Kong, not just from the perspective of a nation-state, but also focusing on city-state. He introduced me to Professor Alan Smart at the University of Calgary in Canada, who specialized in squatter issues. We promptly invited Alan (and other famous Asian Geographers) to Osaka together with Wing Shing, and held the "Osaka Workshop for Frontiers of Asian Geographies".

Unexpectedly, the expansion of research into East Asia began so suddenly, that in the autumn of 2000, we applied for funding from the Japan Society for the Promotion of Science for a project titled "Homelessness and Squatting Issues in Advanced Asian Regions: A Comparative Study of Japan, South Korea, and Hong Kong," which was successfully approved for a three-year period starting in 2001. Unable to wait, we conducted the first surveys on homeless shelters in Hong Kong and Taipei in March 2001.

From the very beginning, inquiring with Wing Shing, I learned there were no researchers studying homeless shelters/transit housing in Hong Kong at the time. I asked him how to start such research. Coincidentally, his wife Pui Hing was (and still is) working in the Salvation Army, which manages shelters, so she introduced me to the facility's manager. We immediately visited the shelter in Shanghai Street, Yau Ma Tei, together. It was Wing Shing's first investigation into housing welfare institutions. From there, a series of shelter/transit housing/urban hostels surveys began, and interviews with NGOs and religious social welfare organizations were conducted.

Reflecting on that time, Wing Shing said,

"(Through URP fund,) I have started to build up more intimate networks with social welfare agencies in the city. Accordingly, I have started to know the local community much better than before. For example, the

issue of homelessness used to be a vague concept in my mind, and community organizations like SoCO (Society for Community Organization) were alien entities to me. However, thanks to Toshio, everything changed. This has in turn provided an additional avenue for me to disseminate to the community my more theoretical works on the urban development of the city. This has turned out to be a win-win situation for me."

Since March 2001, both of us shifted significantly to a community-based research style. Wing Shing's street-level activities intensified and deepened in the 2000s, as evidenced by the founding of the Hong Kong Critical Geography Group in 2002 and his subsequent career trajectory.

A major commonality between us was constantly seeking the optimal solution for how city states produce space (the representation of space) and how NGOs and users consume and manage that space negotiating to reach consensus in their community or neighborhood.

Critical geographers are often criticized for being overly theoretical and confined to armchair criticism. However, Wing Shing engaged with the community, participated in numerous dialogues, and provided insights into fostering attachment to the locality and envisioning future visions. In this sense, one could argue that he was also a prominent critical urban social geographer.

For proactive and theoretical urban social geographer, receiving substantial funding from the Global COE for five years through URP in 2007 (refer to the final chapter



Wing-Shing visiting a homeless shelter and chatting with the director of the NGO that assists it
January 2008 (Photo Credit: Mizuuchi Toshio)

of this special section) proved to be a significant research advantage. With this funding, the URP Hong Kong Overseas Office was established at his university. He reflects as follows:

“This had provided funding for some policy research on the social side of local issues. ……This funding has in turn provided an additional avenue for me to disseminate to the community my more theoretical works on the urban development of the city. This has turned out to be a win-win situation for me.”

Furthermore, using this URP funding along with his own obtaining grants, he organized almost annually fascinating workshops and forums. These events are listed in the table below for reference. The workshops, as shown in the photo of workshop on *Social Justice and the City* in 2013, were used to be intimate and very cozy at home. He always managed everything from determining the themes to inviting speakers. The presentations ranged from theoretical to empirical research and were of higher quality. To refresh tired brain work, evenings were filled with delicious dinners and mini-city tours in between. Several books and papers emerged from the scholarly exchanges nurtured here. He looks back, stating:

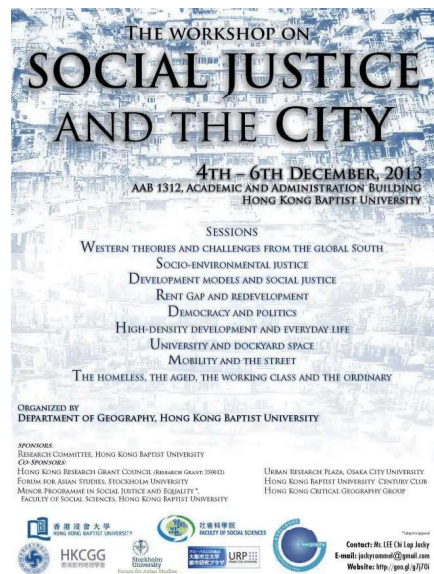
“He (Toshio) has showed great care over the spreading of research findings to the academic community in the world, via conferences and workshops organised either by myself or by us together.”

The benefits derived from this program, shared with URP younger researchers and graduate students, have

been unforgettable and cherished memories.

Lastly, summarizing his personality, he was truly a captivating individual characterized by “hospitality and consideration,” “elegance and stylish,” “approachability and homeliness,” “cherishing comradeship,” and above all, “love for the community.”

Together with Wing Shing, who has gone to heaven ahead of me, still we both would like to pursue this in East Asia, whether it is a representation of space or not. This may be part of his vision for critical geography in East Asia.



Poster of the Social Justice and the City workshop held in December 2013

(Photo Credit: Workshop Organiser)



Social Justice and the City 2013: A Small-scale Venue with a Relaxed Atmosphere

(Photo Credit: Mizuuchi Toshio)

Table List of Events Held at the Hong Kong Office

	Date	Event
1	1999/08	Osaka Workshop for Frontiers of Asian Geographies (<i>held in Osaka</i>)
2	2001/12	EARCAG 2nd Meeting / Alternative Geographies of Asia in the New Millennium
3	2004/04	The First Hong Kong-Japan Workshop: Power, Space and Housing of the Urban Poor
4	2007/05	The Transforming Asian City: Asian Urbanisation Conference
5	2008/01	The Workshop on Social Inclusion, and Cultural Creativity (URP Subcenter inauguration)
6	2009/05	The International Workshop on Urban Redevelopment in East Asian Cities: The People's Approach
7	2011/05	Urban Utopian: The International Workshop
8	2012/05	The International Workshop on Urban Utopianism cum China-India Forum Beyond Gentrification
9	2013/12	The Workshop on Social Justice and the City
10	2015/01	The 5th EA-ICN 2015 (with a field trip to Macau)
11	2015/12	The International Workshop on High-density Development and Social Justice
12	2016/12	EARCAG 8th Meeting / Radicalism in Theory and Practice
13	2018/07	The 8th EA-ICN, Towards the Establishment of the "East-Asian Inclusive Cities"